

アマダイ通信NO.40

(Tile fish network letter)

04年元旦

知人・友人各位

ブッシュのイラク侵攻劇を大腸がんの開腹手術の病床で見るといふ、多事多難の1年もようやく終わり、エジプトの砂漠の中で、コーランの祈りに囲まれて、新年を迎えています。新しい年も世の中平穏無事、とは行きそうにありませんが、せめてと読者の皆さんにとって幸多い一年であることを祈念し、節目の40号を送らせていただきます。

たった一月で辻君国会議員に！皆で国政を愉しもう！？

民主党の公認決定が10月にずれこみ、一月余りの選挙運動しかできなかった大学の寮の1年後輩の辻 恵弁護士ですが、近畿の比例区11番目でぎりぎり当選。投票日前日の11月8日(土)の朝、毎月一回の抗癌剤点滴の化学療法最終戦、5回戦のために入院した●は9時半の消灯時間までテレビにかじりついたのですが、結果が出ません。翌朝6時前に目を覚ましニュースを見ると、比例区のどん尻で当選しているではありませんか。奈良の選挙区で民主党の新人が頑張って当選したので、比例区最後の議席が回って来たらしい。聞けば当確が出たのは真夜中の1時半とのこと。本人も気を揉んだろうが、比例区でも国会議員には違いない。これからは選挙区でも国会議員として活動できるので、次回はもっと有利に戦える。たった一ヶ月の手作りの選挙運動で、公明党・創価学会の強敵を向こうに回して7万数千票を獲得、比例区で当選するほどの僅差だったのだから、次は小選挙区での当選も夢ではない。何よりも、国政の場で国民全体のために働くことができるのだから、弁護士として一人一人のクライアントのために頑張る以上に、働き甲斐がある。学生時代に共に活動する中で培った社会正義への思いと、弁護士活動で身に着けた法技術、粘り強い交渉力を、国政の場でも発揮して欲しい。

そうは言っても、一年生議員。広い国政の全ての分野で自分なりの政見を持ち、力を発揮するのは容易なことではない。アメリカでは民主党、共和党それぞれに系列のシンクタンクを持ち、政権の座にあるか否かに関わらず政策作りに勤しみ、政権が変わると官民のメンバーが交替する。日本では与党は唯一の政策シンクタンク、霞ヶ関の官僚システムを組織的に利用できるが、野党はそれに匹敵する組織を持たない。官僚も自分達の良しとする政策は与党を通じて実現するので、野党には十分な情報を流さない。しかし、政権交代を掲げて戦われた今回の総選挙で民主党が躍進し、今年7月の参議院議員選挙、次回の衆議院議員総選挙と政権交代が現実的になって来ると、流れも変わる。今回の総選挙で若い霞ヶ関の官僚が多数民主党から立候補したのもその兆しである。

幸い、霞ヶ関には三鷹の寮や駒場のキャンパスで共に生活し、学んだ仲間がまだ枢要のポストについている。上杉秋則公正取引委員会事務局長、国土交通省松野仁都市地域整備局長、丸山博鉄道局長、小島敏郎環境省地球環境局長、鈴木直和厚生労働省官房長、北村俊昭経済産業省製造産業局長、上原美都男内閣官房衛星情報センター分析部長、総務省有富寛一郎情報通信基盤局長、伊藤祐一郎総括審議官、奥村万寿男警察庁警備局長などに、それぞれの分野で政策立案につきご協力願えればと思う。勿論官界のみならず、学会、経済界など各界で活躍中の皆さんの知恵とネットワークで“司祭”としての辻君の活動を盛り上げ、皆で国政を愉しみたいものである。政事=祭事(まつりごと)なのであるから。

無事五回戦終了、闘病第三期へ

入院して一日5百ccの5FU(フルオロウラシル)を主体に、抗癌剤を5昼夜連続で点滴する化学療法も11月で無事終わる。10月の四回戦では食道や胃の粘膜をやられ食事をするのが大変だったので、今回は最初から食道や胃の粘膜を保護する粘っこい飲み薬を貰う。お陰で食事時の痛みは消えるが、食欲不振は相変わらず。四週間入院し大腸をリンパ節もろとも30センチ切り取った闘病第一期で、73キロから68キロまで減った体重だが、その後の懲りない暴飲暴食で71キロまで回復。それが5昼夜で1キロスリムになる。もっと減って欲しいが、食欲不振の割には余り減らない。体も使わないからだろうか。

半年かかった抗癌剤集中治療の闘病第二期も多少の食欲不振、消化器系の炎症を除けば、脱毛、白血球数低下、吐き気、酷い口内炎などといった典型的な副作用も余りみられず、点滴終了と同時に病院を飛び出して、職場復帰する我がままと許してもらった。瀬戸内寂聴は剃髪の方がずっとかわいいが、碧の黒髪は一般的に女性にとっては大変大事なもののようで、病室でも帽子を被っている女性患者が多いが、治療が終われば又、生えて来る。こわいのが白血球数低下による感染症だ。そのため抗癌剤の点滴が終わっても白血球数が回復するまで数日、病院に留め置かれることが多い。

11月に退院後スタートした闘病第三期は、二年間続く。取敢えず30日分もらった抗癌剤の顆粒を朝晩一服ずつ飲んで、1月後主治医の阿川先生の診断を受ける。転移の怖れの強い肝臓と肺のCT(コンピューター断層撮影)を見せてもらい異常なし、腫瘍マーカーも異常なし。白血球だけでなく、血小板も正常値とのことで、次回の診察は2ヵ月後で大丈夫でしょうと、60日分の薬をもらう。二年後も変化がなければ他臓器への転移なしとなり、抗癌剤から開放され、五年無事に経過して完治ということになる。ついでにうかがうと気になる脂肪肝も大したことなしとの診立て、一時期少し高かった血圧も正常値になっている。一時考えたPET(陽電子放射断層撮影)と重粒子線による検査と治療は、腫瘍マーカーが正常値を示している所以要らないでしょう、腫瘍マーカーの数値が異常で、CTでも患部を特定できない時にやればよいという結論になる。

取敢えず命に別状はないとしても、結局、リンパ節への転移の有無が治療法の分かれ目、転移なしなら患部の切除で終わる。謂わば審理の結果死刑の宣告が猶予され、その場で釈放だ。転移があれば抗癌剤療法が必要となる。死刑が宣告され一時刑務所に収容、“矯正措置”を受けるが、二年間死刑の執行が猶予される。矯正期間が終われば釈放、時々裁判所に出頭し尋問を受ける。“生活態度”(これが問題だ!)が良ければ五年で死刑の宣告が取り消され、裁判所への出頭もなくなる。要は癌になってもリンパ節へ転移する前に発見し、治療することが肝腎だ。その意味でも定期的に検診し、早期発見に努める必要がある。

浮世と憂世はコインの裏表、いざ!エジプトへ!

毛沢東の実践論・矛盾論ではないが、武具には攻具と防具があり、コインにも表と裏があるように、人間にも表裏がある。とは言っても裏表のある人間とか、ととかいう訳ではない。物事には矛と盾、コインの裏表のように二面性がある。両面をバランス良くみて行動する賢い人もいるが、専ら表の、積極面を見て楽観的に考える人、裏側のマイナス面に目が行って、悲観的になる人がいる。癌を告知されると、程度の差はあれ落ち込み、うつ状態になる人が多いようであるが、能天気な単細胞[●]は、大方の傾向に反して何時も楽観的で、逆境でも積極面、希望を見ようとする。

大腸がんを手術、リンパ節にも転移し、肝臓や肺に転移の虞ありということになっても、外皮一枚残すところで留まり、腸壁が破れなかった。癌細胞が腹腔内に拡散して手遅れにならずに済んだと、胸をなで下ろす。隣のベッドで肺がんの患者が呼吸するたびに苦しみ、食道癌や胃癌の患者が食事が喉を通らないと訴え、直腸癌の患者が便の漏れを嘆くのを聞いて、大腸癌で良かったと自らを慰める。切った腸がつながりさえすれば、生活に何の不都合もない。不都合のないことが、癌が生活習慣病の一つと言われる、その生活習慣の改善に結びつかない。相変わらず飲んだくれ、それが次のステージで運命を暗転させるのではと、多少は危惧する。が、取敢えず、ま、いいか、ラッキー、やりたいことをやって・・・と考えてしまう。いよいよ死の間際にどう考えるのか、と、来世の存在を信じない[●]は心配するが、多分、これで憂世とおさらばできる、とでも思うのだろうか。

そんな[●]に天も味方したのか、浮世を愉しむ軍資金を少しプレゼントしてくれる。会社を作った時に、かつての慶大共闘ML派の“同志”村中裕君に、退職金代わりにとすすめられて、ソニーの生命保険に入る。死ねば生命保険がセットの住宅ローンもチャラになるし、他にも保険金が出る。カミさんも働いているし、十分だ。生きている間に保険金がもらえる保険はないかね？冗談半分に村中君に訊ねると、あるという。毎月二万円弱掛けると、癌や脳梗塞などの成人病になれば一千万円貰えると言う。脳梗塞や心筋梗塞で、あつという間に成仏できれば使う暇もないが、癌であれば、余命の半年や一年はある。働けなくなった時は生活費になるし、死ぬ前に世界一周旅行でもすれば冥土への土産話にできる。これは面白いと入る。(興味ある方は090・3530・6519村中君へ)

軍資金を手に五月の連休は娘とスペインへ、お盆休みは顧問先の社長とチェコ・ハンガリーに遊ぶ。ハプスブルグ帝国の次はオスマントルコへ歴史を遡ろう。正月休みはいよいよイスラム世界へと計画するが、冬のトルコは寒くアンカラ辺りは雪が降るといふ。躊躇している間にイスタンブールで自爆テロが相次ぐ。暖かいエジプトに変えると、今度は阪急旅行社の同じツアーで、カイロ・アレキサンドリア間で立て続けにバスの横転事故が起き負傷者が出る。さすがに同区間は列車に変えると連絡があり、現地の人間と交流できバスより面白いと気持ちを切り替えると、同じ旅行社の南米ツアーでバスが道路から転落、7人怪我したニュースが入る。せつかく癌には諦めてもらえたかと思い始めた命なのに、交通事故で失うのはもったいないが、シナイ山での初日の出も中々魅力的である。

映像で白神の里へ・・・「白神の夢」東京で上映

アマダイの古郷八森町が映画になりました。前々号の「延安の娘」に続き、長編記録映画「白神の夢」- 森と海に生きる - を紹介いたします。映画「白神の夢」は、秋田県八森町の後背地に広がり、世界自然遺産に登録された白神地区の、「固有で豊穡なる森」がもたらす命の連鎖と恵みとその流域で生活する人々を映し出します。人類史を遙かに超える時間を変わらぬ生命体として生き続けた「白神の森」に学び、近代の負を乗り越え、新たな一歩を踏み出す八森の人々を、カメラは淡々と胆力を持って記録しています。豊かな流域、豊穡に輝いていた「森と海」、命と大地の記憶が今、現代に夢をはこびます。

東京での上映は千代田公会堂(千代田区九段10-19-10、営団地下鉄九段下)で平成16年2月21(土)・22日(日)、昼13:00から17:00、夜17:00~21:00の4回上映、会費は各回千500円です。[●]は八森中学の同期生と21日の昼に鑑賞、そのまま飲み会(同期会)になだれ込む予定です。皆さんも如何ですか？

黒い水が透明に！・・・炭鉱汚水の浄化実験成功！

中国山西省大同市の黄土高原の農村で緑化協力活動をする「緑の地球ネットワーク」(GEN)の、汚水浄化活動につき、高見邦雄事務局長の黄土高原だよりの抜粋を転載します。

地元の「大同日報」によると、1tの石炭を採掘する過程で、平均2.48立方mの地下水が失われるそうです。坑道が地下深く伸びると、地下水脈を破壊して水が出ます。汲み出しますが汚染され、そのままでは使えず多くを捨てます。大同は中国一の石炭の街で大小466の炭鉱があり、その周囲で80数万人が深刻な水不足に苦しみます。今年7月から、雲崗石窟へいく途中の青磁窯炭鉱で、炭鉱水の浄化が始まりました。逆浸透膜を使った日量1350tの本格的な施設で、建設費が500万元(7千5百万円)以上。処理水は水道用水になり、民間企業の経営で水1tの販売価格4元(60円)。金のある大炭鉱ではそういうことも可能ですが、今、大同の多くの零細炭鉱は、操業もままならず水を買うお金にも困る状態です。

大阪産業大学の菅原正孝さんのチームが、生物処理を提案しました。鉄バクテリアを使い、大規模な設備も薬品も不要で、安価に処理できる可能性があります。実験の場所を南郊区雲崗鎮の呉官屯に決めました。雲崗石窟のすぐそばです。9月にいった時も、11月にいった時も、村営の小炭鉱は操業を停止しています。廃坑になる可能性もなくはない。血まみれになった労働者を何人もみました。ケンカしたんです。仕事はないし、お金はないしで気がたっているようです。入り口から覗いても坑道はまっ暗。25度くらいの傾斜で、斜坑が350メートルほど地下に伸び、そこに水が溜まっています。垂直の深さは、地表から100m。水温は10~13度。実験装置は簡単なものですから、坑道の奥の水面に近いところに作れば冬も凍結しないし、すべてが簡単ですみます。ところが、外部の人間は坑道へは立入禁止。安全上の問題がある。「臨時工として、私を雇ったらいい」といったんですが、相手にされない。仕方なく地上で実験することにしました。保温その他面倒ですけど。ところが、いまひとつ気乗り薄に感じられたんです。大同事務所の武春珍所長が再度、交渉に当たったところ、費用の負担を求められることを心配していたのです。操業停止で全くお金がない。その心配はいらないと説明して、実験する場所を提供してもらいました。

11月14日、大同に到着するとすぐ私は現場を訪れました。物置の1室が整頓されドラム缶などの資材も準備されていました。日本で準備した図面を渡し構造を説明しました。17日は北京でのJICAのワークショップに臨み、その後2日間大同の私たちのプロジェクトに参加者を案内しました。20日に現場でできあがった装置を動かしたところ、前後の連携の悪い所がみつき、21日手直ししてもらいました。大阪産業大学の濱崎竜英さんと王英さんが大同に到着したのは21日の夜です。準備が整ったと伝えると、「こんなに短期間でできるなんて、とても信じられません」と、濱崎さん。いわれてみるとそう。日本国内だってこうはいかない。22日朝から、装置を立ち上げ、動きとしてはまず問題なし。直径30センチの塩ビパイプとドラム缶を使った簡単な装置ですが、1日あたりの処理量は70tほど。今の段階では5種類の濾過材を用い、それぞれの効果を比較することにしました。

坑道から揚がってくる水は濁っています。ドラム缶にためると底がみえない。この段階でわかったことは水の中にタール分も含まれることです。ミネラルウォーターの空きビンにサンプルを採ってたんですけど、それくらいの量では発見できなかった。濾過後の水は透明です。少し口に含んでみると臭いも味もない。有毒物質のないことは水質検査でわかっていますが飲用には鉄、マンガン、硫酸イオンなどが多すぎる。それらの除去には微生物の定着・繁殖まで多少時間がかかります。装置の組みつけはこの炭鉱の電工、王如がやってくれました。



とても丁寧で溶接初め、色んな作業をこなせるので重宝です。白髪でシワが深いので 60 歳は超えてるかと思ったんですけど、「きっと、私より若いよ」と、通訳の王萍にはいったんです。そのあたりが私の経験というもの。本人に確かめたら「44 歳で、1960 年の生まれ」といいます。44 歳も数えですね。今後の管理も彼に頼むことを内々で決めました。炭鉱は操業停止ですから、彼にとっても都合がいい筈。

22 日の午後、緑色地球ネットワーク大同事務所の武春珍所長が、急用で市内に帰って行きました。それまでどんな問題も彼女を通じて、現場の人たちと話していたんです。それでスムーズに進んできました。簡単な器材しかないんですけど、濱崎さんが熱心に水質を測定するのを見て、王如が話しかけてきました。「この水を、きれいにする目的は、何ですか?」。もちろん、村の人に使ってもらいます。武春珍も、彼らに説明していた筈。でも、そんなうまい話は信じてもらえなかった。「あなたたちが、木を植えるためにこの水を使うんだ、と思ってましたよ」というんです。そこを王萍にいていねいに説明してもらいました。すると、彼の表情が変わったんです。そして、話したんですね。「ポンプを設置してあるのは 2 号坑で入り口から 350m、垂直の深さは 100m です。その水は季節により変動が大きい。さらに 130m 奥に 3 号坑があり、ここの水は安定して水質もいい。垂直の深さは 130m ですけど、遠心ポンプの揚程は 160m だから、能力的に問題ありません」。なんということだ!こちらの目的を伝えるのは何をやるにしろ、最初の第 1 歩なのに、できていなかった。どこにいても自分の目で現場をみるのに、今回はできなかった。でもまだまにあいます。ポンプの設置場所を変えてもらいました。その夜、武春珍に冗談めかして話しました。「あなたが一緒だと、あなたのおしゃべりばかり聞かされる。いないと他の人の話をきくことができる。だから、今日は、収穫が大きかったよ」。私自身にとっても、大きな反省点です。

特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク (GEN): TEL.06-6576-6181

E-mail gentree@vc.kcom.ne. URL <http://member.nifty.ne.jp/gentree/>

捨てればゴミ、回収すれば資源 (1) ・ ・ D ネット勉強会より

昨年、同和鉱業の吉川社長 (S 3 2 年東大三鷹寮入寮) に三鷹クラブで講演していただいたのに続き、団塊ネットの勉強会で同社リサイクル事業部の仲次長に講演していただきました。詳細なテープ起こしでしたので、の力ではまとめきれず、二回に分けて、の“勝手要約”を掲載させていただきます。精錬会社だけでなく、製鉄業、セメント産業等も産業廃棄物を受け入れ、再資源化に乗り出し、最先端の事業となっています。同和鉱業の根拠地大館地区は故郷能代の後背地です。現在、船での資材の運搬は青森の港を使っているが、できれば能代港を使いたいという、吉川社長の弁です。廃液を垂れ流した能代産廃の問題が尾を引き、地元も腰が引けているようですが、リサイクル業は今や、先端産業。物流だけでなく、リサイクル施設としての利用も考えて欲しい。一度、能代でも講演会を開きたいと思いますので、関係各位のご協力をお願い致します。

同和鉱業とリサイクル

同和鉱業の創業は明治 17 年、1884 年です。政府より秋田の小坂銀山を製錬設備を含め払い下げを受け創業しました。資本金 364 億円、主要事業は一つが製錬部門・銅、亜鉛、鉛、金、銀、その他レアメタル等々の精錬です。平成 6 年まで国内に鉱山がありましたが、現在は全て閉山しています。二つ目が私の所属する環境リサイクル部門、三つ目が電子材料・金属加工部門です。経常利益は 97・8 年平均連結ベースで 87 億で、製錬

が63%を占めますが、2002年度は120億、構成比率は製錬がグッと減りました。製錬業は金属の価格や為替相場等々により変動しますが、会社のバランスがとれてきたと思っています。沿革的には明治30年には水力発電所を十和田湖の近くに持ち、続いて小坂から車で三十分ほどの花岡鉱山を買収、岡山県には柵原鉱山があります。環境リサイクル事業は、それら鉱山跡地を利用したものです。80年代までは鉱山製錬業が中心でしたが価格や為替変動に弱く、90年代は多角化・事業構造改革を進めました。コアになる事業は買収してでも進め、非中核ビジネスについては売却か撤退しました。03年度は製錬、環境、電子材料、熱処理・金属加工その他の絞り込みをやっているところです。

同和工業と環境リサイクルのつながりですが、鉱山から鉱物を掘り、鉛や銅がまじったものを小麦粉状にわけ、物理的な重さの違いを利用し選鉱、製錬所に持っていくのが鉱山業です。一方、環境事業の中で汚染土壌処理は鉱山業がそのままスライドしたものです。廃棄物処理も同様に運搬収集そして処理ができます。鉱石の中には硫化物が含まれ、亜硫酸ガスにしてから硫酸にして回収しますが、排ガスコントロール技術が、廃棄物の処理や焼却に生きます。同時に鉱石には、金、銀、銅、亜鉛の有用な物も含まれ、回収すれば有用ですが自然に拡散させるとよくない物も含まれます。それが現在の廃棄物のハンドリング技術に使われています。整理すると、廃棄物処理業、これは廃棄物処理法という法律の中にある中間処理、例えば焼却や中和という無害にする処理と、最終的にリサイクルできないものは埋め立てますが、中間処理施設と廃棄物埋め立て場を持っています。そのほか調査から処理まで一貫して出来るのは、鉱山の探査から選鉱、製錬までできる技術のスライドです。調査から処理まで一貫してできる会社はそうありません。ゼネコンがこの業界に多く参入していますが、運搬して埋め立てて終わりのところが非常に多いようです。

次にリサイクルですが、リサイクルニーズとは、「もったいない・危ない・捨てられない」ということにあります。「もったいない」とは昔からの考えで、古銅を古電線等からリサイクルするのは戦前からです。携帯電話には金が200ppm含まれますが、鉱石よりも含有率が高いので我々は携帯電話を買います。最近では「危ない」からリサイクルするという考えがあります。金を払ってもいいからリサイクルしたいのは、環境負荷の防止を考える、リスクとして環境破壊を防ぐ考えです。もう一つは「捨てられない」という考えです。環境汚染防止法が来年施行されますが、最近では自動車リサイクル後の残渣が捨てられない、日本は処分場がもうない、作れないため、豊島や青森、岩手のような不法投棄が問題となります。我々の取り組みはそれらを再資源化、リサイクルしようというものです。

同和鉱業のリサイクルネットワーク

リサイクルのネットワークについてですが、我々の得意はメタルです。元々製錬業で硫酸、プラチナ、パラジウム、ロジウム等の金属を回収しています。別会社にはしていますがリサイクル廃棄物や汚染土壌部門が前処理して、製錬所に持込み再資源化します。リサイクル原料の例として、ここに揚げたものは有価物、お金で原料を我々が買っているものです。工場のロットアウト品や半導体のリードフレーム、端材、酸化銀電池の材料になるパウダーは同和工業が世界シェアの90数%もっています。従って我々が売ったものがまた買って帰って来ることとなります。同様に電子機器の基盤類を外した物を年間数万トン買います。携帯電話もそうです。危ない捨てられないということですが、金属含有量が少なくなっている所以我々は有価物として買えませんが、ハンダの鉛がついてるとか、カドミのメッキがしてるからリサイクルしなければいけない物も最近ふえてきました。

その中心になる小坂製錬所は銅の製錬所でありながら金と銀と銅の売上げ比率が同じくらいです。小坂製錬所の銅の生産は年間8万トンくらい。同業では日鉱金属佐賀関や三菱の直島は年間の銅の生産が40万、50万トンですからそれに比べると数分の一ですが、金の生産は年間17トンくらいでかなりの比率です。銀の生産では日本の年間生産量が2千トンですが、そのうち7百トンでトップシェアです。銅の製錬所でないが金と銀の比率が高くなっています。原料の特徴ですが、他より金なら2.5倍、銀にいたっては十倍以上の含有率です。銀があると精錬しにくいのですが、銅の含有率の低い鉱石をくっつけています。鉛や亜鉛以下の不純物が入ると、他の製錬所では下痢を起こしますが、そういうのを好んでくうので、リサイクル物もへっちゃらです。不純物十倍の物をくっつけています。銅製錬所のプロセスは複雑で、年間35万トンの鉱石をくいますが、リサイクルものの性状や含有量により、それぞれのプロセスにつっこみます。

廃棄物とリサイクル関連法との関係ですが、日本では産業廃棄物と一般廃棄物に分けられ、一般廃棄物は家庭ゴミ、産業廃棄物は事業所ゴミとなります。建設リサイクル法とか食品リサイクル法とかあり、2001年スタートの家電リサイクル法等と仕組みが違いますが、黙っていると全てゴミになります。たとえば処理困難物として冷蔵庫の処理は家電リサイクル法でメーカーの責任になる、しかし費用は消費者が負担してよい、そういう法律が次々出てきました。もったいないからリサイクルではなく、危ないから捨てられないからリサイクルというふうになることで、さらに法律の強制力により、我々にとってビジネスチャンスが出てきたのです。家電リサイクル法施行をにらみ、秋田県花岡鉱山跡地にエコリサイクルという会社を設立し、順調に操業してます。ソニー、シャープ、日立、三菱、富士通ゼネラル等からも出資していただき、リサイクルをやっています。リサイクル工場といっても、要するに分別してるだけで、分別し素材ごとにわけます。我々は小坂製錬があって、分別できないものは最終処分場をもってますのでグループ内でおおむね一貫処理出来るのが強みです。自動車リサイクルは2004年に新法が施行されます。

簡単に自動車リサイクルについて述べますと、ユーザーから一台一トンの廃車が解体工場にいきます。そこで三百キロ位の色々なリユース物を外します。残った七百キロはプレス業者でプレス、さらにシュレッダー業者、つまり破碎業者に破碎してもらい、次に鉄を回収する磁力選別をします。しかし自動車のシートやプラスチックというダストが2百キロどうしても残り、処分場にそのまま埋めますが、シュレッダーダストの中にも銅が2~4%含まれます。あるいは鉛がコンマ3%含まれます。とれば資源、拡散すれば悪いものです。しかも燃やせば熱エネルギーを回収できますので、小坂製錬の中に新しくシュレッダーダスト用の炉を作り、シュレッダーダストや貴金属が余り入っていない基盤を、逆有償、つまりお金をもらってボイラーで熱回収します。燃えたものにはメタルが濃縮しているので、製錬の工程にいれて銅や鉛を回収します。月に四千トン強のシュレッダーダストを順調に熱回収しております。

合計74万3千円、留学生支援ありがとうございました

前々号で東京大学留学生支援基金へのご協力を呼びかけましたところ、12月12日現在で、37名の読者の皆様から合計26万6千円のご寄付をいただきました。ありがとうございました。時々🐷が苦言を呈する田舎のゼネコン大森建設や三楽病院の主治医阿川千一郎外科部長はじめ、31名の方々からは5千円以上のご寄付をいただきました。辻代議

士当選の立役者、路上観察学会事務局長でもあり、企画・編集会社同文社社長兼翻訳者、著作者でもあり、かつての駒場新聞編集長でもある、前田和男団塊ネット世話人著「足元の革命」を以下の31名の皆様に、著者の寄贈により贈らせていただきました。服部 彰、遠藤 昭、中村 英、久保田 康史、当間 義俊、佐々木 陽子、阿川 千一郎、七山 征子、桜井 尚武、小林 真人、松田 和久、大塚 健生、佐々木 満、立野 省一、干場 憲三、中西 寛義、武田 善行、木下 恒雄、飯川 守一、海老沼一夫、南谷 昌二郎、勝川 高志、山口 修、岩崎 強、菅原 正孝、高橋 元、山口 三恵子、大高 孝雄、中居 隆博、大森建設株式会社（敬称略）の皆様、本当にありがとうございました。

又、別に案内しました三鷹クラブの方は、77名の会員の皆様から、44万7千円いただきました。アマダイ通信での案内が先になり「足元の革命」をお送りした方の中にも三鷹クラブの会員がおりますので、実数はもっと多くなります。月一口5百円の掛け金で協力する大学職員と、OBの協働で毎年1千万円以上集め、留学生の勉学生活を支える基金ですが、合計74万3千円は大きな金額です。12月6日、大学と三鷹市国際交流協会の共催で三鷹寮で行われた「留学生と三鷹市民の交流の集い」にも招待され、出席しました。今年で早10回目になりますが、OBを代表し、早期に高層棟を完成して千人の寮に拡充、共用施設を充実し、勉学・居住環境を改善すること、OB会も物心両面で協力する用意があることを訴えました。定数6百人中2百人の留学生が居住する東大三鷹国際学生宿舎のOBである会員の皆様、まだでしたらお手許の振込用紙で宜しくお願い致します。

中・韓・台を主体に留学生も文部科学省の長年の目標、十万人をクリアしましたが、他方、北九州での中国人留学生3人による強盗目的の一家四人惨殺事件など、留学生の凶悪犯罪も増えています。背景に、少子化で経営の難しい日本の大学が、定員を満たそうと甘い言葉で留学生を募り、生活費が高く誘惑も多い日本で夢破れた留学生が、金のために犯罪に走るがあります。又、昨秋中国の西安の大学の学園祭で日本人留学生の演じた寸劇が中国を侮辱したとの批判から暴動に発展、日本人留学生が暴行され怪我する不幸な事件がありました。日本でなら「愛嬌」で済むことも侮辱と感じる文化と「歴史認識」の違い、底流での体制への中国の若者の不満、情報統制がありますが、相互の理解を深め溝を埋める地道な作業が必要です。いきなりミサイルを撃ち込んだり、「軍隊」を派遣するのでは国際間の問題は難しくなるばかり。現に困っている留学生のために、僅かずつのお金でも出し合い勉学生活を支え、日本を理解して帰ってもらう。沙漠化し飲む水もないところでは、木を植え飲み水を作る。学校のないところでは学校を作り、学校に行けない子供の「里親」になって学校に行かせる。貧しい日本が豊かな欧米から助けもらったように、「類的存在としての人間」が、「一人は万人のために、万人は一人のために」と支えあう。何故か、ヘルメットを被ってゲバ棒を持ち、血相変え走り回った頃と同じことを考える🐞ですが、所詮「できること」しかできないけれど、多少とも「人の役に立っている」ことを実感できるのは、「一人では生きていけない」人間として素敵なことだと思います。

最近のロシア内外情勢と日露関係・三鷹クラブ52回定例懇談会

1 昨年11月までロシア大使として活躍した丹波實氏が講師です。昭和13年5月樺太生れ、札幌東高校卒、昭和32年三鷹寮入寮、36年法学部卒、外務省入省。ロシア課長、安保課長、条約局長、サウジアラビア大使などを歴任、平成9年外務審議官就任、橋本龍太郎首相とエリツィン大統領との日ロ交渉に常に同席するなど、日米ロ関係に一貫して携わる。

昨年現役を退き、退任直後半年間は毎日のように講演していたとのことで、グッドタイミング。寮前後の紹介を同期の田村達也氏にお願いしました。(最終的文責は秋山順一先輩)

丹波さんと初めて顔を合わせたのは今から47年前の春3月末か4月の始め、三鷹寮の満開の桜の下であったように思う。札幌出身の色白瘦身の好男子で、太宰治を論じる感受性の極めて豊かな文学青年であり、私とは全然別のタイプの間人であった。お互い地方の高校から出てきた心細さがそうさせたのか、それ以来良き友、良きライバルとして長い間の付き合いとなった。三鷹寮にたむろしていた俗物のお兄さん方とは若干の距離をおき勉学に励まれ、外交官試験に合格、ハーバード大学でロシア語研修を受け、モスクワ大使館に着任。その後北京大使館、本省の安保課長、条約局長、外務審議官など外務省のエリート中のエリートコースを走り続けていたように思う。私の記録に残る彼の外交官としての晴れ舞台は、日中国交回復条約調印の準備をした後、調印式で田中角栄と周恩来の後ろに立ち条約文書を交換した姿がテレビに映った時である。また感心したのは、沖縄返還条約の国会に政府委員をサポートする事務官として出席し、国会答弁ファイルに膝を抱え瞬時に上司にピッタリの答弁案を差し出していくその有能官僚振りである。

最終の大使ポストとしてモスクワ駐在大使に着任したのは、彼が外務省に入りロシア語研修をした以来の一つの到達点だったと思うが、時代は移り共産国ソ連でなくロシアという新興国に変わっていた。また退官を迎えた時期は外務省が鈴木宗男氏との関連で猛烈なバッシングを受け、その余震がなお続くという不幸な時期であった。この半世紀に近いタイムスパンの中、時代は大きく変わっているが、この間日本の外交は何であったか、丹波さん独特の鋭い切り口で聞かせてもらえたらと期待している。(田村先輩記)

日 時 平成16年2月5日(木) 18時30分~21時

会 場 学士会館本館(千代田区神田錦町3-28 TEL:03-3292-5931)

講 師 丹波 實 前ロシア大使(現日本エネルギー経済研究所顧問)(昭和32年入寮)

演 題 「最近のロシア内外情勢と日ロ関係」

会 費 5,000円(会場費、夕食・ビール代、講師料、通信費等込み)

二次会を予定しています(約3,000円、近くの中国料理三幸園)

申込先 平賀俊行 FAX 03-5297-5020 TEL 03-3256-0559 緑富士(株)

干場革治 FAX 03-5689-8192 TEL 03-5689-8182 (有)ティエフネットワーク

秋山順一(33年入寮) FAX: 03-3553-4753 ライフ・インターコティエ

e-mail: tfn-hoshiba@blue.ocn.ne.jp jakiyam@nifty.com

日本の食文化を！会席料理で現役寮生と交流

年に1,2回、寮委員会のメンバーが交替すると、三鷹クラブ世話人と新旧寮委員会メンバーで食事を共にし、寮委員諸君の労をねぎらいます。このところ、中野サンプラザのパーティールームで、寿司や中華でカラオケも交えてというスタイル。今回は国際学生宿舎で留学生と付き合うのだから、ファーストフードやファミリーレストランとは違う、日本の食文化をもっと勉強してもらおうと、新宿の日本料理屋へ。格子戸を潜り抜け、打ち水してある飛び石伝いに太鼓橋を渡り、赤い毛氈を踏みお座敷へ。先付けから始まり、焼き物はアマダイの一夜干しとは行かなかったのですが、伊勢海老の治部煮をメインに7,8品、伝統の会席料理を味わう。津軽三味線で民謡のサービスもあり、現役諸君には目新しく、勉強になった様子。ロートルも若者との交流を愉しむ。

今回は委員長の笠原由加里さん（理、三重）を筆頭に、三代真己（理、大分）、滝口鉄也（理、高知学芸）、日比野有美（薬学部、一宮）、寺嶋隆満（総合文化、開成）、古武智子（文、岡山朝日）、高木穂香（理、南山女子）、加藤かおる（広域科学、清水東）、中嶋藍（理、岡崎）、亀田堯宙（理、東大寺学園）、齋藤大輔（理、洛南）、三野功晴（D3環境学、六甲）と、三分の一という入寮定員の割合以上に女性が多い。

国際学生宿舎という性格ゆえ、定期発行の委員会報も和英の二ヶ国語で書かれ、国際色豊か。留学生にも合わせた春秋の入寮歓迎会等も、以前は教養学部がお膳立てする部分が多かったが、最近は寮生だけで企画・運営している様子。入寮定員の一部は自治会活動に意欲的な学生を、寮生が選考して入れるようになったという。60年代後半、我々が寮を拠点にやりたい放題やった反動で、文部省も過激に走り、旧制高校以来の自治寮の良き伝統が消えてしまったが、大学も丸抱えで寮を運営するのは難しいようで、徐々に自治的要素が増えているようだ。個室で、共用部分も少ない寮では自治会の運営も大変だが、民主主義の学校としての自治的要素が復活して行くのは、歓迎すべきことだ。若い寮生諸君の手で新しい自治の伝統が生まれ、切磋琢磨する中で国際感覚優れた各界の次代の指導者が輩出、日本と世界の平和と発展に資するような三鷹寮であって欲しい。そのためにOBも多少の役に立てるとしたら、望外の幸せである。

封筒の番号末尾40番、故郷の味、ハタハタ鯧贈ります

今年は節目の40号特大号記念で、封筒の連番、末尾二桁が40番の方に「お年玉」として、故郷八森の加賀木水産（<http://www.shirakami.or.jp/kagamoku/>）のハタハタ鯧を贈ります。岩館漁港で今シーズン獲れた、本場の秋田名物八森ハタハタ、昔ながらの味です。

少年の頃、年の瀬、嵐と共にハタハタの大群が産卵のため岸に押し寄せ、町はハタハタ一色になります。吹雪の中を漁師は大波を乗り越え小船を繰り出し、船べりまでハタハタを満載して帰ります。岸では女たちが手際よく木箱に詰め、岸辺や防波堤では子供や年寄りがタモ網で掬い取ります。膝ほどの深さでも産卵場所を求めハタハタがウロウロ泳いでいるので、アイナメ釣りも、あわび採りも余り得意ではない“郵便局の革チャン”でも、多少の漁果をあげられるのです。朝飯も、昼の弁当も、夜の食卓にも、焼いたり、煮たり、しょつつる鍋にしたりで、ハタハタが並びます。食べ切れないハタハタはご飯と米麹、人参、キャベツ等の野菜と一緒に漬け込まれ、正月の食卓に並びます。内臓や鱈は塩辛になり、品切れになると、味は落ちるのですが、塩漬けのハタハタを塩出しして、又、鯧を作ります。冬の秋田に八森ハタハタはなくてはならないものなのです。

大漁が続いたハタハタですが、産みつけた卵までブリコと称し食べてしまう乱獲のせいで、故郷を後にする頃は殆ど獲れなくなりました。漁師なんて馬鹿な奴らだ、目の前のものは何でも獲ってと思ったのですが、その後、3年間の禁漁を経てハタハタ漁が復活した時は漁師を見直しました。11月の末に久しぶりに秋田へ出張したので、ハタハタ漁見たさに実家まで足を伸ばしました。まだ暖かくて魚群は沖にいるらしく、漁協の二階の番屋で岩館小学校同級生の秋田一二君が鉢巻をして、「待機だ」と海を見つめていました。寒さと共に大漁の報せが届きましたが、獲れるようになると値崩れします。この夏、金沢の近江市場の源平鯧でハタハタの握りをご馳走になりました。あっさりした味ですが美味しく食べました。漁師にとって“美味しい魚”であるためには、伝統の味に加えて、時代にあった新しい食べ方の工夫も必要ではないでしょうか。再見！